

〈焦点1〉

## 坂野文俊住職に聴く 困難を乗り越えて生きる

坂野文俊\* 樋口倫子\*\*

\* 曹洞宗円通山普門寺 \*\* 明海大学

Live Your Best Life: How to Cope with a Traumatic Event and Overcome Your Feelings of Hopelessness

Bunsyun Sakano\*

\* Fumonji

Noriko Higuchi\*\*

\*\* Meikai University

&lt; Abstract &gt;

宮城県山元町山寺の普門寺、坂野文俊住職は、山元町で、東日本大震災発生直後から、復興に向けて尽力された方である。坂野住職は、「あまりにも悲惨な状況で、何もできず無力感に苛まれた。考えることもできず、ただただ直感に従って、行動した」と語る。住職の「人びとの笑顔が見たい」という思いが、大きな出会いを生み、お寺ボランティアセンターが設立され、多くのボランティアを受け入れる拠点となる。坂野住職にとって、支援者とは、「現場へ行く一歩を踏み出す勇気を持ち、現場の様子を肌で感じ、現場の人の声に耳を傾け、自分の直感を信じて行動し続ける人」のことである。

キーワード

東日本大震災 great eastern Japan earthquake disaster

山元町 Yamamoto town

困窮体験 traumatic event

震災復興 earthquake disaster reconstruction

ボランティア活動 volunteer activity

### はじめに

平成23年3月11日、東日本大震災が発生。太平洋沿岸部広域を中心に甚大な被害をもたらされた。宮城県亘理郡山元町では、地震そのものによる被害に加え大津波が襲来、698名の方が亡くなり、全壊および半壊家屋は3300戸（山元町の6割）に及んだ。

普門寺坂野住職は、その山元町で、震災発生直後から、復興に向けて尽力された方である。普門寺では津波で本堂が全壊、そして多くの墓石も倒され、流された。住職は、震災直後から一人で、「墓が壊

れて、ただただ檀家さんに申し訳ない。先祖が長い間眠っている場所で供養をしてもらいたい」という思いから、墓石を一つひとつ元の位置に戻すという果てしない作業を続けた。体重は3カ月で10kg以上減ったという。

バラバラになったお骨が寄せ集められ、小高い丘「骨塚」となった。その後、普門寺はお寺ボランティアセンター、通称「テラセン」として、地域の再生のためのボランティア拠点となる。

「困難を乗り越えて生きる」のテーマで、普門寺の住職に就かれてから25年、震災、そしてその後の

地域再生までの体験、「テラセン」での活動、自身の思いについて、坂野文俊氏から話しを伺った（図1）。

### 住職不在の普門寺の第1次再生

樋口（インタビュアー）：普門寺の住職として就任



図1 ご講演中の普門寺住職坂野文俊氏

され、小さな寺の再生に当たられた当時の様子を教えてください。

坂野：永平寺東京分院で修行後、20歳で山元町に戻りました。普門寺は、父が兼務していた小さい本堂だけのお寺でした。管理されていなかったので、屋根が朽ちて、雨漏りのする寺でした。バケツに落ちる雨漏りの音で、木魚をたたかなくてもお経が読めるような状態でした。法事が月に1回あるかないかで、収入がほとんどなく、墓地も町の共同（墓地）でした。自分の力で、墓石を動かしていました。

檀家さんは、子どものような年のお坊さんが来たので、話しはきいてくれない。檀家さんとの信頼関係を築くためには、できることから行動に起こすしかなかったのです。

墓地を整備しようと、墓石を一人で動かしていると、近所を通る檀家さんに、「なにをやってるんだ？」と声を掛けられようになりました。一生懸命やっている姿が次第に理解され、コミュニケーションがとれるようになり、檀家さんもだんだんと増えていきました。

25年かけて、やっとの思いでお寺の環境整備が整い、お茶でも飲みながら、和やかなお寺をつくっていかれると思っていた矢先でした。震災が起こったのは。

### 普門寺の被災（図2,3）

樋口：震災の時の様子について、教えてください。

坂野：津波は、普門寺の辺りで、7～8メートルだったと思われます。お寺に戻れたのは、数日後でした。一階部分が大破して、柱だけが残っていました。本堂の屋根も落ちていました。骨壺からはお骨が出ていて、本堂の仏具も流されていました。25年かけて築き上げたものが、震災で一瞬にしてなくなり、何をしていたのかかわからず、立ち尽くすしかない状況でした。

約250人の檀家さんがいるのですが、そのうち60人位の方々が亡くなりました。1週間後くらい経つと、遺体があがってくるのです。怒りをぶつける場所がない。何百という遺体を見ていると、坊主なのに「死にたい」と思いました。自分は、なんで生きているのか、なんで死ななかったのか、と。

亡くなった人に対して一生懸命、お経をあげる。一方で、僧侶は生きている人に対して、より良く生きていくためのアドバイスをする役目もあるのです。しかしその時（被災直後）は、何もできない、言葉もかけられない、という状況でした。あまりにも悲惨な災害で、かける言葉もない。無力感しかなかった。坊さんなのに、何もできない。瓦礫の前に座って、一日中、ぼっ



図2 被災した普門寺本堂(2011年3月撮影)



図3 被災した普門寺墓地(2011年3月撮影)

と過ごす日もありました。

樋口：25年かけて作り上げ、建て替えたばかりの本堂が破壊された様子を見て、最初は、ただただ放心状態だったとのことですが、それから、どんな思いで普門寺を再生されようと思われたのか、教えてください。

坂野：もう何も考えられないから、行動を起こそう、と思いました。とにかく、瓦礫を出そうと。

自転車で寺に行って瓦礫を拾い、お経をあげに行く、という日々でした。当時は、ジーパンとTシャツ、息子の迷彩色のジャンパー。流された革靴を拾って、洗って履きました。パールとスコップも買いました。何よりも、頭が混乱している。檀家さんも、もつとつらい思いをしているだろうと、作業をしながら毎日、考えていました。

2011年4月の時点で、檀家の役員さんが、「本堂を行政が無償で壊してくれるので、負担がかからないように取り壊す」という決定をしていました。後日壊すとすると、500～600万円はかかる。本堂と自坊を建て替えて間もなかったのに、建て直すお金もなかった。「住職も辛いだろうが、あきらめてくれ」と。

納得できない気持ちのまま、寺が立ち入り禁止区域だったのですが、勝手に入って瓦礫を片付けました。

#### 先祖の眠る場所に、人々は還りたいと願う

ある時、檀家さんがお墓を見に訪れましたが、自分のお墓があるところまで、入っていけないのです。檀家さんは、「家は無くなったが、先祖が築いてくれたお墓だから、動かしたくない」というのです。それを聞き、みんなここに来るんじゃないだろうか。みんな、お墓が気になって見にくるだろう。おじいさんやおばあさんも来るのに、当時は履物がない。スリッパを履いて、お墓を探しにくるので、瓦礫があつて、危ないのです。お墓を確認しにくる檀家さんが絶えなかった。

それで、まずはお墓を確認できる通路を作ろうと思ったのです。津波で、墓石は40～50cmの砂や泥に埋まっていた。通路を作ろうと、朝から晩までその作業が続きました。建物の瓦礫やガラスの破片も混じっているので、作業ができるのは、一日にしてわずか半分くらいだった。毎日、それを繰り返し、繰り返しやっていました。

やり始めたら、いつか終わると思っていましたが、

一日やっても、50センチしか進まない日もありました。一日、泣いていたこともあります。怒りのぶつけどころもなく、地面をたたいていたこともあります。

#### 藤本さんとの出会い（図4）と、お寺ボランティアセンター

樋口：お寺ボランティアセンターを設立された経緯や、その活動の動機について教えてください。

坂野：ある男の人（藤本さん）がボランティアに来ました。「住職が倒れるから、心配だから、ボランティアを入れたい」と。情報を聞きつけて、「お寺の片づけを手伝わせてほしい」と言いに来たのです。

行政では立ち入り禁止区域でしたから、「責任をもてないので、結構です」と断りました。しかし、藤本さんは、毎日、朝7時くらいに来る。1カ月近く、2人で黙々と作業をしていました。そして、「お寺を再建しようとして、がんばっている住職がいる。手伝ってくれ」と、インターネットで呼びかけてくれました。立ち入りが禁止されている、何の保証もない。「特別警戒」は、町が決めただけなのですが、インターネットで状況を配信し、ボランティア参加を呼びかけましたが、1カ月、ほとんど誰もこない。

7月の初旬に、センター長1人、坊さん一人だけで、お寺ボランティアセンターを立ち上げ、看板を掲げました。行政側にはボランティアセンターがあります。民間で勝手に、ボランティアセンターを作りました。立ち入りが制限されている地域の人々が片づけを、安心して頼めるようにと思ったのです。

#### 藤本さんを通して、「人とのつながり」を生んだ

仲間たちが、Facebookを通して呼びかけるようになると、次第にボランティアが集まるようになりました。



図4 お寺ボランティアセンター  
センター長 藤本和敏氏



図5 お寺ボランティアセンター  
(通称:テラセン)

一気にボランティアが入ってきました。1カ月で1000人が来たと思います(図5)。

お骨が混じった砂を寄せ集めました。1カ月で、小高い丘のようにになりました。そのお骨の入った砂を、瓦礫と誤って持って行かれないように、骨塚の上に観音様を祭りました(図6)。

樋口:観音様の盗難事件がありましたね。

坂野:報道されていないことですが、被災地では、賽銭箱盗難などは、しょっちゅうでしたので、私自身、(観音様は)もう出てこないだろう、とあきらめていました。

しかし、住民の人達は、観音様がなくなったことを許さなかったんです。報道関係者が一斉に報道してくれました。そして、数日後に観音様が戻ってきました。

#### 少しずつ復興が進むと「思い」もかわる

樋口:ボランティアが入って、墓地も徐々に片付いて、復興が進むと、周囲の人達の「思い」も変わるといようなことが、起こりますね。

坂野:そうですね。「住職、墓地がきれいになったので、流れた墓石を戻して直したい」という檀家さ



図6 お骨の混じった砂でできた骨塚

んが、出てくるのです。石材屋さんは、被災したエリアが広すぎて、なかなか来てくれない。自分で、石を動かそうと思って、そこで機材を借りることにしました。そういった、「やってはいけないこと」までやりましたね。墓石を元にあった場所に戻せば、その場所で手を合わせるができるだろうと考えたのです。

すると、檀家の役員の方が、次に「本堂の屋根が落ちていたので、あれを直すから…」というのです。壊すといったのに。だんだん気持ちが変わってくるのです。いつのまにか。

いつからか、役員の方は、「本堂の屋根を持ち上げよう」と言った。屋根を直すと、本堂の抜けた壁を直すというように、コトが運んだのです。

本堂が残せるという希望が生まれました。「本堂を残せる」と思った瞬間に、「自分は一生ここにいる。自分はここを動かさない。ご先祖様を守って、俺はここにいる。俺は待っている」と。希望と怒りと悲しみ入り混じった、激しい感情を抱きながら、そう口にしていました。それが、檀家さんのところに響いたのだろうと思います。

皆、気持ちが変わって、壊すはずだったのに、いつの間にか、再生する方向に物事が進んでいたのです。その姿を見て、またボランティアがもつと集まる。不思議な現象が、どんどん進んでいきました。

樋口:ものすごい数のボランティアが入りましたね。

坂野:学生のボランティアも何度も来ていただいて、お寺の再生を手伝ってくれています。お寺と共に、地域の方々の家のお手伝いもしていただいている。

樋口:お寺の再生から、地域の再生に目が向いていったのですね。

坂野:そうですね。看板を揚げたときから、地域のためのボランティアセンターなので、ニーズをいただいて、地域の方々の家の片づけや瓦礫の撤去など、ボランティアの方には、とにかく地域の方々のニーズを聞きに行ってもらった。ニーズのない時には、お寺の再生を手伝ってもらいました。

センター長の藤本さんがいなければ、気づかなかったことがあった。いろいろなことに気づかされた。藤本さんは、寺から周りの住宅へと、ニーズを探して、出て行きました。住民の人が帰って来ていると気がついてから、藤本さんは、そこにも手を差し伸べてい

たのです。自分も手伝いたいと思いました。寺だけ再生しても意味がない。住民あって、ひとが居て、の再生だから。寺はあとでいいと思ったのです。

手伝いに行って、片づけが進んだ人が、また次の人をひっぱりあげればいい。そういう応援をしたいと思ったのです。

樋口：8月には、思いもよらない、本堂での供養が実現されましたね。

坂野：本堂では、例年8月に供養を行うのです。今年も、例年のように供養をしなくては、という思いになり、お盆の供養を企画しました。当時は、誰も本堂で供養ができるとは思っていませんでしたので、檀家さんは、誰一人来ないかもしれないと思いながらも準備をしました。

250人以上の檀家さんがいますが、実際には、当日、例年の倍以上の檀家さんが集まってくれました。危険区域で立ち入りが規制されていたのにもかかわらず、です。午前中から夕方までずっと、お寺にいます。今まで近隣に住んでいた人が、一度集まると、話しが尽きないのです。

そういう場所を提供することが大事なのだと気づかされました。それで、ひとが集まる何かをやろう。復興祭をやろうと企画したのです。それが過ぎると年末になる。

クリスマス会を駅前で行って、人が集まる機会づくりをした。そのあとは、年越しをしようと提案しました。いろんな人たちが集まるきっかけづくりをしたのです。

すると、地域住民が、主体的にボランティアに声掛けするようになっていきました。自分たちがやりたいことを、ボランティアに協力を得るような形になる。

いろいろな発見があって、日々いろいろな形で変わっていく。住民が中心となって、人を集めるという方向性になっていきました。

### 生きる意味を探した

#### 希望を持った人々の顔が見たかった

坂野：わたしは計算をして、将来を見据えて計画を立ててやっているわけではなかったのですが、ボランティアの声、近隣の人の声、住民の声を聴き、その声を受けて、進めて、また次に進めてきました。ここに描いたことは、必ず実現できる。出来ないことも、

「やる」と言って、やってきました。

毎日、寺に来て瓦礫をひろい、少しでも前に進んでいる。生きる意味を探したかったのです。希望を持った顔が、笑顔が見たかった。この地に戻るために、自分のように動き出す人を、もっともっと増やしたかった。

### 現場に行く一步を踏み出す勇気を

樋口：本学会のメンバーは、さまざまな分野での支援の実践家です。ご住職のお考えになる「真の支援」「真の支援者」とは、どのようなものでしょうか。

坂野：何でもできると思うのです。自然に負けるのは嫌だった。「ざまあみろ」と言いたかった。

現場に立って感覚で動く。思いついたことから、「こうかな」と行動してみる。

樋口：それは、常識にとらわれず、自分の直感力を信じて進むということでしょうか？

坂野：そうかもしれない。自分は、「感覚で動く」タイプで、考えよりも行動が先に立つのです。そして、行動してみて嫌な感じがしたら止める。その時に、方向転換すれば良いのですから。行動を起こして、スムーズにコトが進めば、それは、理解され、成功しているということだから。これは、現場にいかないとわからない。

それから、これからの時期は、精神的な面での支援が必要だろうと思います。当時から必要だったと思いますが、その時は、バタバタしていて、それどころではなかった。異なった環境で、がむしゃらにやってきたものが、成し遂げられると、次に何をしたいのかわからなくなる。家が建った瞬間に、ここに穴が空くという感じです。生活環境は変わってきている。家が建って、仮設から出る人、残る人…。妬みもできます。コミュニティが崩壊し、今まで、普通に接してきた人々の間にも、心の溝が生じてきました。

話をきくことが大事だと思います。ストレスがたまるとうき出し口も必要なので、一日中お寺にいる人もいます。お互いに言いたいので、聴いてくれる人が必要なのです。これから作業的なボランティアのニーズは減少していきますが、精神的なケアやカウンセリングなどは、これからはしばらく必要になってきます。行っても役に立たないといことはありません。「ここに来ている」ということが大切なのです。

「テラセンはいつ終わるのか?」と聞かれますが、私は一生やるつもりです。地域の人は、皆不安だから。二度とあの遺体の数は見たくないのです。来て、住民の声をきいてください。遠くにいて、テレビで観るよりも、考えていることよりも、現場の声を耳で聴いて、感じてほしいのです。

### 共に歩み、共に生きていく

樋口:本堂の壁に、記された書に目とまりました(図7)。ご住職が書かれたものと思っていたのですが…。

坂野:私が書いたものではないです(図7)。これは、檀家さんが書いたものです。そして、この詩は、東京から来ているボランティアの女性の方が作って、私にくれたものです。私はこの詩を読みながら、やってこられました。「共に生きよう」というメッセージから、いつも応援してくれるという思いが伝わってくるのです。こんな思いを、ボランティアさんも持ってくれたということに、これほどうれしいことはない。今でも、忙しい中、年に何回かは来てくれて、家族のように付き合っています。たぶん、一生、この方とは生き続けると思うのです。

### 復興とは、「振り返ってみた時に、笑って語れること」

樋口:住職にとって、「復興」とは、なんでしょうか?

坂野:後になって、お茶でも飲みながら、それまでのことを振り返り、震災当時のことを笑って語れたら、それが復興なのだと思います。

2014年、震災から3年半以上が経過した11月に、山元町を訪問した時は、普門寺ではちょうど、寺カフェが催され、多くの住民が訪れていた(図8)。檀家

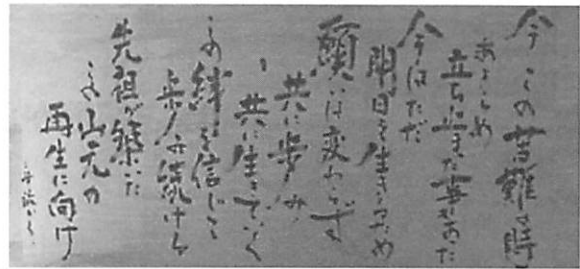


図7 普門寺本堂の壁に記された書

さんではない住民や観光の方にまで、無料で手作りのケーキとお茶が振る舞われた。「みんなの喜ぶ顔が見たい。皆が集い、笑ってお茶が飲める寺にした」という坂野住職の願いが実りつつあるように感じられた。

「ひとは、絶望の淵に追いやられても、強い気持ちでひとを動かす。ひとは弱くもあり、ひとは強くもある。ひとは笑顔のつながりを求めて生きる。」坂野住職の生きざまに、学んだことである。

坂野文俊

昭和38年1月 宮城県亘理郡山元町生まれ

昭和58年4月～大本山永平寺東京分院にて  
修行

昭和58年3月 駒澤短期大学卒業

昭和58年4月 曹洞宗円通山普門寺住職就任

平成23年7月 「おてら災害ボランティアセンター  
(通称;テラセン)」設立、

平成26年5月 朝日新聞デジタル「住職・住民・ボラ  
ンティアが再建 山元町の普門寺」

<http://www.asahi.com/articles/ASG4T7521G4TUNHB01T.html>

などメディア出演多数



図8 再生した普門寺(2014年11月撮影)